

障害のある子どもや人の “こころ”を理解するために

富井 奈菜実

奈良教育大学 特別支援教育研究センター

障害のある子どもや人の“こころ”を理解するために

奈良教育大学 特別支援教育研究センター 富井 奈菜実

1. 発達診断って？

みなさんは“発達診断”という言葉聞いたことがあるでしょうか。おそらく馴染みのない言葉ではないかと思います。

発達診断というのは、主に障害のある子ども・人の障害や発達の状態を明らかにし、どのような教育や支援が必要であるかを見立てることを言います。通常、発達診断を行う際には発達検査や知能検査が用いられます。これらの検査には年齢ごとに標準化された項目が配置されており、すべての項目にわたって「できた」「できなかった」と評価されます。そして検査の結果は、「〇歳〇か月」という発達年齢で示されたり、「IQ□」という知能指数で示されたりします。これらの数値はその子（人）の発達の状態を知る一つの情報となります。しかし、項目一つ一つの“でき方”にはその子（人）それぞれに“違い”があります。

例えば、検査者が積木で作ったトラックと同じものを作れるかどうか、という項目⁽⁴⁾があります。この項目に対してAちゃんは「できる！」と自信たっぷりで取り組み成功させます。対してBちゃんはなかなか手が出ません。「やりたくない！」「できない！」とお母さんにしがみつきます。そこで検査者が「じゃあまずは積木でたくさん遊ぼう！」とBちゃんが作りたいものを作れるように提案しました。するとBちゃんは笑顔になり、積木で様々なものを作ります。しばらくしてから、「じゃあトラックも作ってみよう！」と声をかけると、Bちゃんは張り切って「うん！」と返事し、トラックを作る項目を成功させました。

AちゃんとBちゃん、検査の基準に従えばどちらも「できた」と評価することができます。ですが、はじめから自信たっぷりのAちゃんと、徐々に取り組めるようになったBちゃんのでき方には“違い”があるといえます。発達診断は、このような一人一人の“でき方”に着目し、なぜBちゃんはすぐに取り組めなかったのか、なぜ徐々に取り組めるようになったのか、というBちゃんの“ところ”に迫ることを一つの目的としています。そして、この時に私たちは発達段階というものを想定し、その子どもがどんなふうにものごとをとらえ、働きかけているのかを明らかにすることを目指します。

2. 発達段階って？

発達段階も馴染みがない言葉かと思いますが、こちらは何となく想像がつくのではないのでしょうか。発達段階というのは、ある質的な特徴をもった発達の時期のことをいいます。次のエピソード⁽²⁾をもとに具体的に説明したいと思います。主人公は、そーちゃん（3歳4か月）という男の子です。（名前は仮名）

【“2つの関係”を楽しむそーちゃん】

食事の場面での出来事です。そーちゃんは丸めたおしぼりを右手に隠し、握りしめた左手とともに「どーっちだ！」と私に聞きます。残念ながらおしぼりは彼の右手には収まっていません。私は容赦なく「こっち～～」と彼の右手を指さしました。そーちゃんは「ピンポーン！」と右手を開きました。素直なそーちゃんに（ちょっと意地悪してごめんね...）と思いましたが、延々と続けられる「どーっちだ！」問題に、私はおしぼりを隠した右手をさし続けました（なぜか毎回右手に隠すのです）。そーちゃんもその都度「ピンポーン！」と応じていました。しかし、突然「ブー！」と反応を変えてきました。「えー！なんでやねん！」と思わずつつこみます。当たっているのに、その後はずっと「ブー！」です。（く…仕返しか…）とっていると、「おとーさんにもやってや」とそーちゃん父の登場。早速そーちゃんは右手におしぼりを隠して「どーっちだ！！」とおとーさんに問います。おとーさんは彼の右手を指さしました。すると「ピンポーン！」です！！私は「なんでなん！もう一回やって！」とお願いし、また彼の右手を指さしました。「ブー！！」です。次のおとーさんは「ピンポーン！」です。私には「ブー！」、おとーさんには「ピンポーン！」…。そんな息子を見て父は「よくわかってるやん」とノリがわかる息子を褒めていました。

田中ら^③によれば、3歳頃は「一つのものを二つの対比的な概念で判断し、そのレベルでものごとを多面的にみることができるようになる」時期です。また「3歳になると、その営みがいっそう確かになり、多面性や多彩さを備えてきます。二つの対比的な関係概念である2次元を、姓-名に見られるように結合させたり、男-女に見られるように区別したり、2歳-3歳に見られるように発展的にとらえたりすることができ始める」、「わかっている2次元を区別し、それを入れかえて結合させたり、置き換えたりする柔軟な自由度と間接性がそなわってきています。幼いユーモアの誕生です」と述べています。

このように、3歳頃は物事を対比的な概念でとらえるようになるという発達の質的な特徴があらわれる時期なのです。田中らはこの時期を“2次元形成期”とよんでいます。そーちゃんの2次元の世界は、豊かに広がっています。みぎのて（おしぼりを隠している手）-ひだりのて（そうでない手）を区別し、「どーっちだ！」と2次元的問題(?)を出します。この「問題」も問い-答えという2次元的关系が成立しています。また答えに対して「ピンポン！」-「ブー！」という2次元での評価を行います。さらに自由度の高さを感じるのは、「ピンポン！」から「ブー！」への切り替えと、とみーさん-おとーさんを区別した2次元の關係に、とみーさんには「ブー！」、おとーさんには「ピンポン！」と別の2次元を結びつけているところです。「どーっちだ！」問題という単調な遊びを、2次元という関係の中で豊かに展開しているのです。そしてその意味合いがわかって面白がれること、まさに幼いユーモアの誕生という表現がピッタリではないでしょうか。

今回は3歳頃の発達の時期について説明しましたが、田中らの理論では幼児期には1歳半頃、2～3歳頃、4歳半頃、5～6歳頃、7歳頃にそれぞれ質的な特徴をもった発達の時期（発達段階）があると考えられています。

3. 発達段階って本当にあるの？

発達段階を想定し発達診断を行うことは有効であるとされ、実際に多くの臨床場面（障害児保育や障害児教育などを行う現場）で実践されています。しかし、これらはあくまで経験論的に語られているものであり、実際にそうした発達段階が存在するかどうかは十分に証明されてきませんでした。そこで、私た

この研究チームでは発達段階の存在を証明する研究を進めてきました。今回紹介するのは、言語や教育制度など、様々な文化的違いがある日本とベトナムの子どもたちに発達検査を実施し、その結果を比較した研究です。

図1は「菱形模写（菱形の描かれたカードを子どもに見せ、模写させる）」⁽⁴⁾、図2は「4数復唱（検査者が言った4つの数字を復唱させる）」⁽⁵⁾という項目の通過率を示したものです。

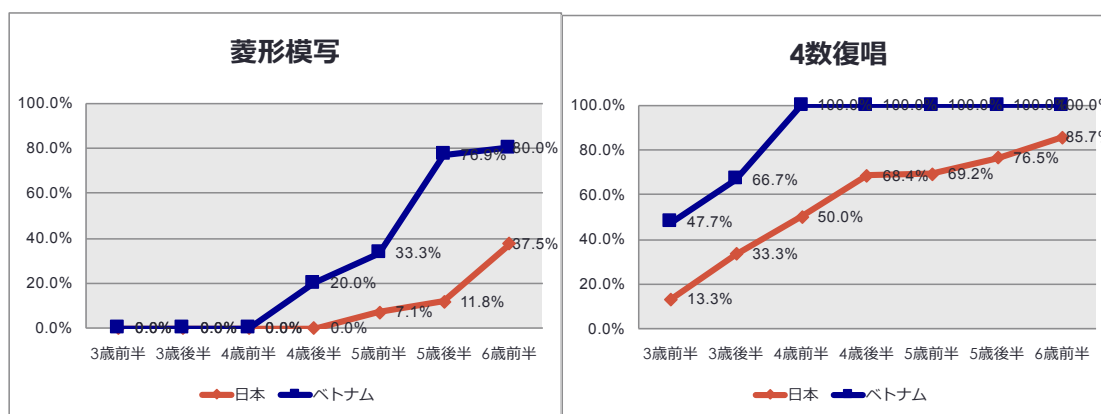


図1 菱形模写の通過率

図2 4数復唱の通過率

日本とベトナムの通過率を比較してみると、多くの子どもが通過するようになる時期は、ベトナムの子どもたちの方が早いことがわかりました。⁽⁶⁾

この結果について服部⁽⁷⁾は、ベトナムの幼児学校（日本の幼稚園）の保育内容や方法の違いが反映されているのではないかと指摘しました。例えばベトナムの幼児学校では「認知」という文字の練習をする時間や、「文学」という詩やお話を覚える時間が設けられているそうです。また「復習遊び」として、「認知」や「文学」を復習する時間もあるといいます。このような日本との教育内容の差によって、通過率に違いが生じていると考えられます。

次にこれらの項目の仲間集めをするという分析⁽⁸⁾を試みました。この仲間集めの分析（多重応答分析という方法を用います）とは、発達検査の項目（子どもたちに実施したものを、関係のある項目同士で集合させるというものです。多重応答分析では、関係がある項目は近い距離で、関係がない項目は遠い距離で示されます。こうして集まった項目の集合は、ある質的な特徴をもった仲間とみることができるのです。そしてこれらをどのような仲間まとめることが

このように幼児期の発達や発達段階、これらに基づく発達診断法について研究が進んできています。まだ分からないことが多いのですが、ひとつずつ明らかに、そして確かになっていくことがあります。このような研究の面白さをぜひ皆さんにも感じてもらえたら、と思っています。

参考文献

- (1)「生澤雅夫・松下裕・中瀬惇編著(2007)『新版 K 式発達検査 2001 実施手引書』京都国際社会福祉センター」より。
- (2)本エピソードおよび解説は、奈良支部事務局(2019)「全国障害者問題研究会 奈良支部機関紙『たちあがる』,No.178」を一部修正の上、引用した。
- (3)田中昌人・田中杉恵(1986)「子どもの発達と診断 4 幼児期Ⅱ」大月出版
- (4) (1)に同じ。
- (5) (1)に同じ。
- (6)「荒木穂積他(2015)『新しい発達診断法開発の試み(その2)』日本発達心理学界第 26 回大会ラウンドテーブル」より。
- (7)(6)の指定討論内、服部敬子によるコメント。
- (8)「富井奈菜実他(2016)『新しい発達診断法開発の試み(2)—幼児期における発達の基本構造の検出—』立命館産業社会論集第 52 巻第 1 号」より。
- (9) (1)に同じ。
- (10) (1)に同じ。ただし、本検査の名称は「大小比較」。

富井 奈菜実 (Tomii Nanami)

2012年 立命館大学大学院 応用人間科学研究科
修士課程修了（人間科学修士）

2017年 奈良教育大学特別支援教育研究センター特任講師



【研究テーマ】

幼児期から学童期の子どもの発達と、これを診断する方法について研究しています。現在は「だんだん大きくなる」など、子どもたちがものごとを順序立ててとらえられるようになる過程や、「私は誰？」という質問をもとに子どもたちが自分自身をどう認識しているか、そこにはどのような発達的特徴があるかについて研究しています。

【趣味】

ビールを飲みながら美味しいものを食べるのが好きです。海外旅行も好きです。

【今の研究分野を選択したきっかけ】

子どもが好きなこと、児童福祉に関わる仕事につきたかったことが出発点です。大学のゼミの先生に進路相談するなかで「発達診断」に出会い、大学院に進学しました。そこで障害のある子どもや人の心をどう理解するのか、という内容の授業を受けたのですが、先生が何を言っているのか全くわかりませんでした…！！しかし、その奥深さに興味を持ち、研究してみたいと思うようになりました。

障害のある子どもや人の“こころ”を理解するために

著者 とみい ななみ
富井 奈菜実

2020年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>